

自己の問題解決を図る探究型学習の在り方

—社会科における「習得・活用・探究」の積み上げを意識した授業づくりを通して—

教職実践応用領域 授業づくり履修モデル
赤松 慶一

1 主題の設定と経緯

(1) 意思決定できずにいる生徒の姿

「先生、私の志望校どこにしたらいいですか。」「(私は自分がどうしたいのか) 分かりません。」

一昨年度、初めて中学校3年生を担当した際、よくこのような言葉を生徒から聞いた。私には、生徒が幼くなってきている実感がある。考えることをせずに身体のみ成長してしまっ、自分で解決しようとする心の成長が置き去りになっていると感じる。

社会科の学習については、「社会は丸暗記すればいい」「暗記ばかりでつまらない」という声をよく聞く。受験を勝ち抜くためには、確かに丸暗記も必要である。しかし、それは社会科の本質ではない。社会的事象について考え、自分で価値判断を行っていくということをおろそかにしている。自分で考え、判断し、解決を図る学習が不足していることが、大切な意思決定をするときに、決められずに迷う生徒を生み出しているのではないだろうか。

(2) 文部科学省の「習得・活用・探究」

学習指導要領総則には、教育活動を進めるにあたり、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うこと⁽¹⁾」とある。

その手立てとして、「習得・活用・探究」の学習過程が有効であるとされている。現行の学習指導要領が全面実施になって2年半が経つ。「習得・活用・探究」に関する、先行しての研究実践も数多く発表され、現場でも広く採り入れられてきている。

しかし、教科における「習得」と「活用」に関する実践の数は多いが、教科における「探究」の実践については不足している。

(3) 中学校社会科学習の実態

中学校社会科の学習指導要領は、「習得・活用・探究」の学習過程を推進している。また、現行の教科書も、その趣旨を受け、「習得・活用・探究」の流れを意識した構成となっている。

しかし、「探究」型の学習については、夏季・冬季休業中に課題として行わせるように計画し、実際の授業時間が確保されていないのではないだろうか。

なぜ、探究型の学習を授業時間内に行わないのか。社会科教員の意見として、概ね以下のような理由が考

えられる。

- ・授業時間を確保し、知識型学力定着のため。併せて問題演習する時間の確保のため。
- ・中学校は、テストによる結果を求められるため。
- ・思考力よりも、受験に対応した結果を求める保護者の目(ニーズ)に応えるため。

(4) 課題

以上のことから、現在、学校現場で行われている社会科実践では、学習指導要領の趣旨が十分生かされているとはいえない。そこで、本研究において、学習指導要領が目指す方向性を、どのような形で具現化していくとよいか考えていきたい。

2 研究の構想

(1) 研究の目的

本研究の目的は、生徒の問題解決能力(=探究型学力)の育成である。

社会科の学習において探究型の学習に取り組み、生徒の問題解決能力を育みたい。下記の3点を、重点として取り組む必要があると考える。

- ・「社会的なものの見方・考え方」を養う学習を実践する。
社会的事象を単なる知識として捉えることから脱却し、そこから何かを感じ取ったり、この問題を自分ならどう解決するかといった思考までつなげる活用力の育成。
- ・「学び方を学ぶ」過程を取り入れる。
既習事項を生かし、生徒から出てきた疑問(=学習問題)を自ら追究し自己解決する学力の育成。
- ・学びを評価からとらえ直し、次の指導に生かす。
形成的評価を重視する。生徒個々の学びの段階を捉え、それぞれの段階と生徒の資質に合った適切な指導を施す。

(2) 「習得・活用・探究」の定義

『中学校学習指導要領解説社会編』には、社会科学習の目的として「公民的資質」を育むことをあげている。「公民的資質とは、民主的、平和的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力である」としている。そのためには、「習得・活用・探究」という段階を経て、「多面的に考えたり、公正に判断したりする」ことが効果的であるとしている。

原田 (2010) は、『習得・活用・探究』は、[教科の学習 (習得過程→活用過程) →教科・領域を越えた横断的・総合的な学習 (探究過程)] という一連の学習過程の中でそれぞれの活動を遂行する力、および遂行した結果身に付く知識・技能 (=習得型学力)、思考力・判断力・表現力 (=活用型学力)、課題解決力 (=探究型学力) と捉える⁽²⁾ ことができるとしている。

しかし、原田の論は、「探究」が「教科・領域を越えた横断的・総合的な学習 (探究過程)」のみのものが中心であるとしているように受け取れるが、探究型の学習は、教科の学習でも実践できるものであると考える。現に、現行の学習指導要領においても、教科内での探究型学習を行うべきと方向性を示している。

(3) 学習指導要領と現行教科書の方向性

ア 学習指導要領の構成

『中学校学習指導要領解説編』には、1年生地理学習の範囲にあたる「世界の様々な地域」に関して、次のような記載がある。

「この大項目は、世界の多様な地域とそこに住む人々の生活を主な学習対象とし、世界の諸地域の多様性や地域的特色を理解させる学習を通して、世界の地理的認識を養うことをねらいとしている。このねらいを達成するため、この大項目は「ア 世界の地域構成」「イ 世界各地の人々の生活と環境」「ウ 世界の諸地域」「エ 世界の様々な地域の調査」の四つの中項目から構成されている。⁽³⁾

イ 教科書の構成

教科書『中学社会 地理的分野』(日本文教出版) は、資料1のように、学習指導要領の構成を具現化した編制となっている。

ウ 習得・活用・探究を意識した学習指導要領と教科書の構成を使い、問題解決能力を養う

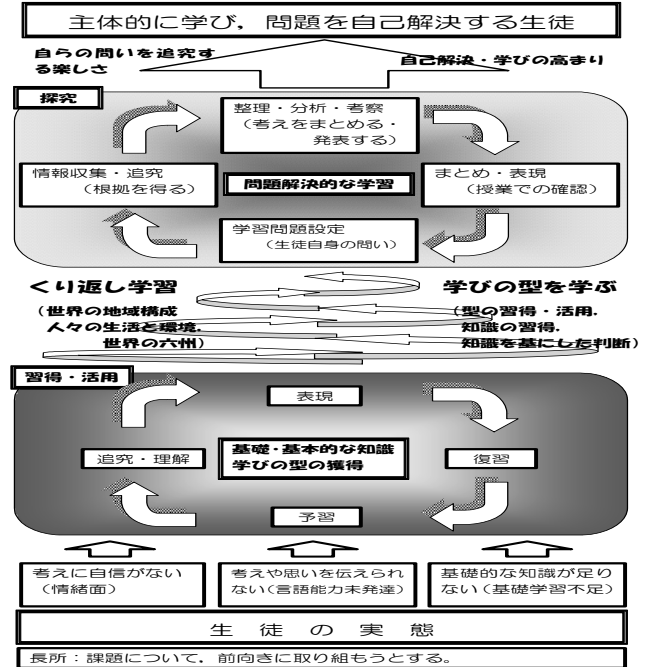
学習指導要領は、中項目「ア」～「ウ」で習得・活用を、中項目「エ」で探究を行うよう設定している。また、教科書は、その意図を汲んで編制されている。

【資料1】 学習指導要領と『中学社会 地理的分野』(日本文教出版)の構成比較

学習指導要領	『中学社会 地理的分野』(日文)
世界の様々な地域	第1編 世界地理を学ぶ
ア 世界の地域構成	第1章 私たちが住む世界
イ 世界各地の人々の生活と環境	第2章 世界各地の人々のくらし
ウ 世界の諸地域	第3章 世界の州のようす
(ア) アジア	1 アジア州のようす
<主題例>人口急増と多様な民族・文化	一 集中する人口や変化に富む自然環境と人びとのくらしをテーマに
(イ) ヨーロッパ	2 ヨーロッパ州のようす
<主題例>多岐の発展と地域間格差	一 文化や産業の歴史的遺産をテーマに
(ウ) アフリカ	3 アフリカ州のようす
<主題例>多岐な経済力の人々の生活	一 伝統的な文化と近代化をテーマに
(エ) 北アメリカ	4 北アメリカ州のようす
<主題例>大規模農業と工業の発展	一 世界じゅうに影響をあたえる産業をテーマに
(オ) 南アメリカ	5 南アメリカ州のようす
<主題例>森林破壊と環境保全	一 開発と環境問題をテーマに
(カ) オセアニア	6 オセアニア州のようす
<主題例>アジア諸国との結びつき	一 結びつきの文化をテーマに
エ 世界の様々な地域の調査	第4章 世界の国を調べてみよう

第1章から第3章で習得・活用を、「第4章 世界の国を調べてみよう」で探究を行うように整えられている。この単元構成は、現場の教師の生かし方によって、教科内での探究型学習が可能になるように作られていると解することができる。この単元配列を生かして、生徒の問題解決能力を社会科で育てたいと考えた。

(4) 研究の構想図



3 研究の内容と方法

(1) 本研究で目指す生徒像

本研究で育てたい生徒の姿を次のように考えた。

生じた疑問について、既習の知識や経験・方法を生かし、自ら調査し考え、結論を見出すことのできる生徒

(2) 仮説

目指す生徒像に基づき、次のように仮説を設定した。

社会科地理学習において、習得・活用・探究の段階を通して、自己の疑問を解決する活動を探り入れれば、主体的に学び、問題を自己解決する生徒が育つであろう。

(3) 仮説に迫る手立て

本研究の重点は、習得・活用場面での生徒の学びを探究場面でいかに生かすかにある。習得・活用場面で学んだ内容や方法が定着していなければ、探究がうまくいかない。また、探究場面で生かせないことを習得・活用させては、やはり探究場面で生徒に迷いが生じるはずである。大項目全体を見通しながら、社会科として身に付けさせたい力は何かを明確にし、それを獲得させるために、習得・活用させた知識や技能を探究場面で生かすという見通しが必要である。

この視点のもと、習得・活用・探究それぞれの学習段階で意識して行っていく手立てを示していく。

ア 習得・活用場面で

(ア) 調べ方を学ぶ

社会科における基礎・基本の一つとして、資料を基にした学びがある。資料から得た情報を基に、根拠を明らかにして自分の考えをまとめる。

習得・活用場面での学習の基本サイクルを、「予習→追究・理解→表現→復習」とした。予習で翌日学習する重要語句や社会的事象の意味を確認し、翌日の授業で学び、復習で確認するという流れである。「①語句や大切な事柄を予習する→②学習課題について予想し自分の考えを書く→③個人またはグループで追究活動をする→④まとめの記述と新たな疑問をまとめる」といった活動サイクルを継続して行い、繰り返し学習することで、基礎基本の定着を図る。

(イ) まとめ方を学ぶー論理的に書く型の習得と活用

「はじめ・中・まとめ・終わり」の論述の型を使って、論理的にまとめ、自分の考えを伝える型を示す。発表に不安や抵抗感のある生徒に型を生かしてまとめを書かせ、安心して発表できるようにしたいと考えた。

また、自分の考えの根拠となる資料については、図や表にまとめたり、具体例として直接示したりすることで、根拠をつけて説明させる。根拠を示して自分の考えを書くことで、内容にまとまりのある記述となり、教師の評価にもつながるように進めていく。

イ 探究場面で

(ア) 探究型調べ学習ー習得・活用での学びを生かす

生徒一人一人の疑問を解決する探究型の学習を、一つの単元として開発し、設定した。世界地理の学習を進める中で生徒自身に生まれた疑問を、自分で調査し解決する時間を設定することで、学習意欲の向上と、探究する力を育むことをねらった。また、習得・活用場面で学んだ技能を生かして、論理的にまとめて発表することを単元のゴールとした。やり方を教え、自己解決への道筋が明確になった状態をつくり、生徒が追究活動に集中して行える体制を整えるようにした。

(イ) 個に応じた学びと指導ー発達段階に応じた指導

生徒一人一人の成長には差があり、それぞれの発達段階に応じて指導を施す必要がある。特に、探究段階の指導では、生徒の活動の様子を見取り、適宜適切な指導や助言を施さねばならない。「学習問題設定→情報収集・追究→整理・分析・考察→まとめ・表現」という学習サイクルの中で、それまでの生徒の学びを教師が把握（形成的評価）し、次にどう指導すればよいか。指導と評価の一体化を念頭に置き、一人一人に適した、個に応じた指導を考えて行っていくようにした。

(4) 検証方法

ア 量的変容

小項目の実践前と後にアンケートを実施し、その変容を見取る。学習問題についてどのように設定し、どのような追究の道筋を辿り、どのような自己解決に至

ったかに注目したい。

イ 質的変容

抽出生徒の記述の変容を追う。ノートやワークシートの記述を内容面から見取る。次の生徒Aを抽出生徒として設定した。

生徒Aの実態と課題

- ・社会科の学習について意欲的である。
- ・豊富な資料を用いて調べ、ノートにまとめることができる。
- ・まとめは単なる羅列にとどまっており、どうすれば他者に伝わりやすいか、何が重要かが判断できていないように見受けられる。

4 研究実践と考察

(1) 昨年度の実践の概要

○概要

- ・教科書の単元配列通り、第1章～第3章で「習得・活用」を、第4章で「探究」を行うように計画して、実践した。
- ・大項目全体を見通して、「習得」・「活用」を積み上げる。そのうえで、「探究型学習」を構築することを目標とした。

○成果

- ・根拠を明らかにし、型を使ってまとめる有効性が感じられた。
- ・やり方を示し、個に応じた指導を施すことで探究型の学習は成立することが分かった。

○課題

- ・定着させるために、探究型の学習を繰り返し行う必要がある。
- ・単元の時間的な制約を解決せねばならない。

(2) 今年度の実践の概要

ア 昨年度からの変容点

【資料3】「世界地理を学ぼう」大項目構想図



第3章と第4章を入れ替えて実施した。利点は、第2章を終えた時点で夏季休業となることである。世界の国について調べる活動を夏休みの課題として、追究時間を短縮し、2学期の授業時間を発表への資料準備と発表時間として費やすことができるようになる。

また、後に回した第3章の学習の中で、生徒の追究したことやその内容を生かした学習を行うようにして、第4章の探究型の学習が、次なる習得や活用の準備となる学習展開を生み出せると考えた。

イ 生徒の実態

実践前にアンケートを実施し、生徒が社会科という教科や調べ学習について、どのように捉えているかを調査した。アンケートの結果から見ると、与えられた学習には前向きに取り組もうとする生徒が多い。また、対象の1年生に関して言えば、社会科の学習に興味をもって臨んでいる生徒が、多い傾向である。

【資料4】第4章実践前アンケート結果

平成26年7月実施	回答数：131			
	1.よくあてはまる	2.どちらかという	3.どちらかという	4.あてはまらない
1 社会の学習は好きである。	50 (38%)	59 (45%)	17 (13%)	5 (4%)
2 調べ学習は好きである。	48 (37%)	62 (47%)	17 (13%)	4 (3%)
3 調べ学習を自分で進めることができる。	30 (23%)	76 (58%)	23 (17%)	2 (2%)
4 自分の考えを分かりやすくまとめることができる。	16 (12%)	54 (41%)	51 (39%)	10 (8%)

しかし、調べ学習や自己表現の活動について、不安を抱えながら行っている生徒が多いことも分かった。

ウ 概要

1学期の学習で習得・活用したことを定着させておく。自分の興味のある国について、夏休みに追究してレポートにまとめさせる。レポートを資料として用いて、発表原稿をつくらせ、ポスターセッション形式の発表会を行う流れで計画した。

(3) 実践の様子

ア 習得・活用場面で

(ア) 調べ方を学ぶー「予習→授業→復習」サイクルの定着

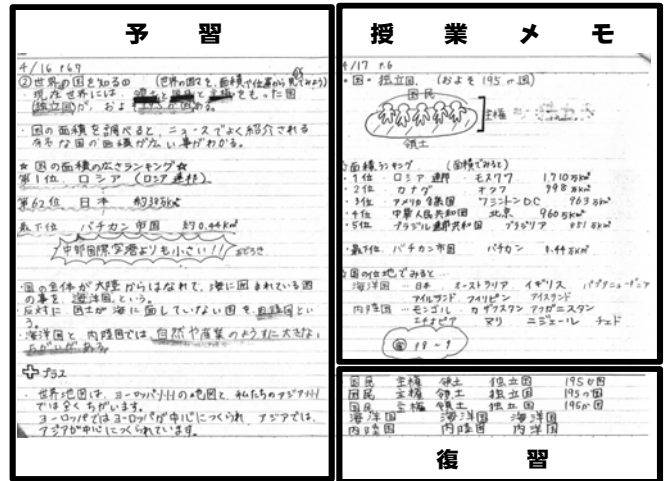
中学1年世界地理の学習内容は、世界の国の表し方や特徴的な世界の国々の様子である。生徒は、衣食住、気候、地形、宗教、経済状態などの視点から、様々な自然的条件と社会的条件があることを知り、その中で生きる人々の様子を学習した。

1年生の始めから、予習・復習を大切にして授業づくりを進めてきた。予習では、教科書該当ページの重要語句の意味を、家庭で用語集やインターネットを使って調べさせた。言葉の意味を知ってから授業に臨ませるためである。復習では、学習したことを確認させ、重要語句を正しく書けるように最低3回ずつノートに書かせることを続けてきた。

資料5は生徒Aの学習ノートである。見開き1ページのうち、左側が予習のページである。右側には、授業で初めて知ったことや大切だと感じたことをメモする。その下には復習として、重要語句を書く練習をす

る。ノートのまとめを見ると、予習でのまとめは羅列的で要点が絞れずにいる。家庭で予習をする際に、資料にあったことを列記するに留まっている。どこに何が書かれているか、大切なことが何か、一目で視覚に訴えるような書き方の指導を施す必要がある。

【資料5】生徒Aの地理ノート（1学期初め）



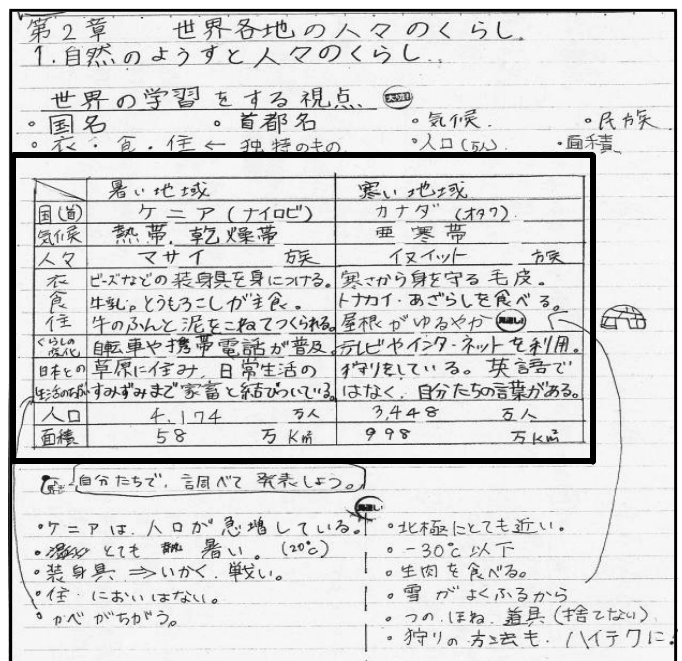
このような「予習→授業→復習」サイクルの中で、生徒は、世界の姿や地図の表し方、特徴的な国々の様子といった学習内容と、資料の調べ方をくり返し学んでいった。

(イ) まとめ方を学ぶー論理的に書く型の習得と活用

調べたことを分かりやすく伝えることができるように、2つのことを重点的に指導した。

1つ目は、伝えたいことを相手に示す時に、図や表にまとめて、視覚に訴えて伝えることである。ただ説明を聞いているだけよりも、目で資料を見ながら理解した方が説得力がある。少ない時間で目で見て理解できるように、図や表にまとめて、まとめた内容を説明することを指導した。

【資料6】生徒Aの地理ノート（1学期中頃）



資料6は、1学期中頃の生徒Aのノートである。1学期初め頃は詳しく調べて書いてあるものの、文章が多く雑然としたノートになりがちだった。しかし、ノートのまとめ方について授業で指導したところ、図や表を多用し、箇条書きで記すようになった。そのため、まとめたいことが明確になり、どこに何が書かれているか見やすく、内容も分かりやすくなった。

2つ目 **【資料7】論理的な思考を基に構成した論述の型**

はじめ	学習問題 (調べた問題) 調べた動機(理由)	私(ぼく)は、 「なぜ、～～なのか」 「～～はどのようにしているか」 「どうして～～なのか」
中	使った資料 分かった事実 疑問の答えにつながるヒント	資料を見てください。これは「(資料の内容)」を表す資料です。 「(事実)」ということが分かります。このことから、「(疑問の答えにつながるヒント)」ということがいえます。
まとめ	自分の考え(答え)	調べてみて、私(ぼく)は「(自分の考え)」と考えました。
終わり	答えを受けて、次なる疑問	今回調べてみて、(感想)でした。次は、「(次なる疑問)」について調べてみたいです。

型を参考にして、社会科の発表のための型をつくり、生徒に示した(資料7)。生徒は、まとめ方を提示したことによって方向性が明確になり、型を参考にしながら文章にまとめることができるようになった。

【資料8】生徒Aの論述

「私は、暑い地域に住むケニアの人々の生活がどのようなものか調べました。使った資料は、(本を掲げて)図書室で見つけたこの本です。このページを見てください。(中略)このようにケニアでは昔からの暮らしと、携帯電話などの新しいものを使った暮らしをしている人の両方がいます。調べてみて、私はケニアでも日本のようにいろいろな暮らし方をしている人がいると分かりました。他にもいろいろな暮らし方があると思います。次は、他の国で暮らし方が変わってきている国はどこかないか、調べたいです。」

資料8は、1学期の暑い地域と寒い地域に関する学習の活用段階として、習得したことや図書資料を使い、特徴ある地域を調べさせた際の生徒Aの論述である。

生徒Aは、調べる中で、アフリカでも日本と同じように携帯電話が使えるようになってきていることに驚いていた。どの国も伝統的な生活様式と新しい生活様式の両方が混在していることに気付いた。

このように、習得・活用場面での「予習→追究・理解→表現→復習」サイクルのうち、「追究・理解→表現」を授業の中心として進めていった。論の根拠となる資料を活用し、論述の型に沿って自分の考えをまとめ、学び合う授業を行っていった。

イ 探究場面

(ア) 第1の探究場面ー夏休み課題レポート

夏休みを目前にした7月、課題として世界の国を調べるレポートを提示した。1学期に世界の特徴的な地域について学習した経験を生かして、自分が興味のある

【資料9】第4章「世界の国を調べてみよう」の流れ

学期	時	学習活動	留意事項
1 学 期	第1時	単元の課題をつかみ、計画を立てる。	夏休みのレポートと、その後の発表に向けて見通しをもたせる。
	第2～3時	レポート作成のための下調べをする。	図書室で資料を探させ、取り組める課題を確認させる。
夏 休 み		【第1の探究場面】 レポートをまとめる。	1学期に学習した内容やまとめ方を生かして、レポートにまとめさせる。
2 学 期	第4～7時	【第2の探究場面】 発表原稿をつくる。	レポートを基に、伝えたい内容をポスターにまとめる。
	第8時	リハーサルを行う。	同じブースの生徒どうしで、会の流し方の確認をさせる。
	第9～10時	発表会を行う。	社会科の内容と発表方法の両方について学ぶ機会とする。

る国では、どのような生活を送っているのかまとめさせた。このレポートが、2学期のポスターセッション形式での発表活動の基礎資料となる。

レポートは、生徒個々の追究力・表現力の差を補うため、難易度を2段階に設定した(資料10)。

【資料10】各コースの内容

Aコース	ひとつの国を調べ、現象の原因や背景を考える。
Bコース	2カ国以上を比較して、類似点や相違点をとらえ、現象の相違が起きる原因や背景を考える。

AコースとBコースの選択結果は、資料11のように1カ国のみと2カ国の生徒がほぼ同数で、3カ国以上調べた生徒はいなかった。調べた理由をみると、第2章で学んだ暑い地域や寒い地域などの自然的条件、宗教や経済状態のような社会的条件について調べたいとする生徒が多くいた。生徒が既習事項から思考を巡らせて、自分の調べたい国を決める視点を見出したことが分かる。

【資料11】コース選択の結果と選択理由

何カ国調べたか (回答数130人)	Aコース(1カ国)	Bコース(2カ国)
	61	69
その国を調べた理由	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の(生まれた)国だから。 ・サッカーW杯で活躍した国だから。 ・キリスト教に興味をもったから。 ・暑い地域にもいろいろな所があると授業で知り、比べてみようと思ったから。 ・父親の出張先だから。 	



生徒Aは、中国とロシアの2カ国を調べてみたいとした。その理由は「日本に近くて、面積の大きな国で、今、経済成長が進んでいるBRICsの国だから」ということだった。1学期に学習した世界の主な国・地域の位置やつながり、BRICsの知識を生かした問題設定となった。

生徒Aのレポートの抜粋が資料12である。レポートの誌面構成を統一し、農業で1ページ、漁業で1ページというように、1ページ1テーマとしてまとめている。

【資料12】生徒Aの作成したレポート



「The BRICs～中国とロシア～」

農 業

<p>・中国の農業</p> <p>小麦、トウモロコシ、ジャガイモ、ピーナッツなどの生産がさかんに行われている。 (亜熱帯の乾燥した土地の気候や、土が適しているため。)</p> <p>ナシ、リンゴ、メロン、バナナ、パイナップルなどの果物類、ニンジンやキャベツなどの野菜類も、さかんに生産が行われている。 (熱帯の作物に中国の一部の地域の気候に合っているため。)</p> <p style="text-align: center;">農業の様子</p> 	<p>・ロシアの農業</p> <p>ロシアの農業の状況は、あまりよくなかったが、長年の苦勞のすえに、生産量が大幅にふえた。 (ロシアの広大な国土の約10分の1しか農業に適さず、農業がロシア人にはなじみがうすかったため。)</p> <p>おむに、穀物、ジャガイモ、サトウダイコンの生産がさかん。 (耐寒性のある作物は、大量に収穫できる。)</p> <p style="text-align: center;">農業の様子</p> 
--	---

中国とロシアどちらの国も、農業がさかんに生産されているものはあるが、中国では、小麦やピーナッツ、パイナップルなどがさかんに生産されており、ロシアでは、ジャガイモや、サトウダイコンなどで、同じく作っているものがある。それは、各々の気候、土地、人々にあったものが作られている。

漁 業

<p>・中国の漁業</p> <p>漁業は中国の沿岸の省でさかんだが、機械化が進み、大規模な漁船で遠い海まで、長期にわたって出かけるようになった。 (経済が発展し、文化が進み、機械化が進んだため。)</p> <p>漁業は、さかんに行われていて、魚、エビ、カニの年間漁獲高は、おおよそ、1200万トン。 (船で遠い海まで、長い期間、行くことができるようになったため。)</p> <p style="text-align: center;">漁業でとれるもの</p> 	<p>・ロシアの漁業</p> <p>漁業がさかんであり、ニシン、サケ、パーチなどを毎年大量に水揚げし、80万トンに達する鮮魚と冷凍魚を輸出した。 (ロシアは寒いため、寒い所に生る魚がよくとれる。)</p> <p>ロシアが「世界のキャビアの90%を生産しているが、キャビアの親であるチョウザメがとれなくなり、キャビアの生産と売り上げに、急いまいをおよぼしている。 (水質を有害な化学物質が汚染したため。)</p> <p style="text-align: center;">スチレン製のキャビア</p> 
--	---

漁業でも、両国がさかんだったが、やはり、その国の気候などに適した力がないと、生きることができないため、国によって、とれる魚、かが違って来る。

そして、1ページの中で図式化して、左側に中国、右側にロシアの内容を対比させて書いている。下段には、自分が感じたことや考察をまとめている。学習したことを生かし、図や表にまとめて箇条書きで記すなどの工夫を施したレポートを作ることができた。

このように、夏休みを利用して追究させたことで、世界の国についてレポートにまとめる探究型の学習について時間を確保して行うことができた。また、論述の型やまとめ方を1学期から示して何度か書かせたことで、生徒は型を生かした文章作成に慣れており、スムーズに活動できた。

(イ) 第2の探究場面①ホプスターセッションに向けての学習問題づくり

2回目の探究型の学習として、レポートの内容で自分の一番伝えたい内容を発表するポスターセッションを企画した。

レポートでまとめたことの中から、自分の最も伝え

たいことを絞り込み、学習問題とすることにした。

探究型の学習では、この問題設定が最も重要である。問題が追究に足りるものでないと、発表に深まりがなくなるからである。生徒には、次のように示して、学習問題設定が最も大切なことと、自分の資料(=レポート)の内容から吟味して作ることを指示した。

学習問題は、疑問形でつくらせた。聞き手が興味をもって聞けるテーマとするためである。「～は、どうなっているか」「なぜ～なのか」と問われると、聞き手はその答えを聞きたくなる。発表のテーマとして、疑問

【資料13】学習問題設定の支援プリント

調べ学習は、学習問題づくりが最も大切

～問題がよくないと、興味深い調べ学習にはならない。～

よい学習問題とするためのキーワード

どの1 疑問形

- 一人くんの興味をひく問題になりやすい。
- 例 ・キューバとはどのようなところなのか。
- ・ケニアにはどのような自然が広がっているのだろう。

どの2 さまざまな国に関わるキーワードを調べる

- いろいろな国を調べることで、発表に深まりができる。
- 例 ・エチオピアは、なぜ「植民地」として支配されなかったのか。
- ・「北アメリカ州」の「広大な土地」にはどのような自然が広がっているのだろう。

どの3 国と国の比較

- 似ているところや違うところを比べて、まとめやすい。
- 例 ・アメリカと北アメリカの間には、どのような結びつきがあるのだろうか。
- ・日本と北アメリカ州の国々とは、どんな違いがあるのだろうか。

どの1～3までの内容を生かして、よい学習問題をつくろう!

形の学習問題を設定し、聞き手が興味をひかれる発表となることをねらった。

生徒Aは、中国とロシアの農業、漁業と、そこから派生した食品の違いを比較することとした。1学期に学習したレポートにまとめた内容のうち、食に特化した学習問題を設定した。

生徒Aの学習問題

「中国とロシアの食にはどんな違いがあり、なぜその違いが生まれるのか。」

生徒が実際に作った学習問題は、疑問形で比較や関連を意識したものが多くあった。夏休みレポートをつくった際に自分が初めて知ったことを学習問題としてきた生徒が多かった。

資料14は、生徒がつくった学習問題の抜粋である。

【資料14】学習問題の一部抜粋

①	なぜ、寒い地方に住む人は身長が高いのか。
気候	赤道付近のコロンビアは、どのくらいの気温なのだろう。
②	なぜ同じキリスト教なのに、違うところがあるの?
宗教	なぜ、中国から日本に仏教が伝わってきたのに、寺院での祈り方が違うのか。
③	カナダとロシアの料理はどこからの影響があるのか。
産業	「予防歯科」が進んでいるスウェーデンと日本の差はどれくらいか。
④	日本と韓国の生活の似ているところや違うところはどんなものがあるか。
文化	オーストリアのウィーンは、どうして「音楽の都」というのか。
⑤	暑い気候の中で過ごす人々の暮らしには、どのような工夫があるか。
衣	隣の国どうしの日本と韓国は、気候や服装は同じなのだろうか?
⑥	フランスの食生活はどのように変わっているのだろうか?
食	カナダには、「カナダ料理」があるのだろうか。
⑦	デンマーク王国の家の造りはどのように変わっているか。
住	なぜアイスランドは、蛇口をひねるとお湯が出るのか。
⑧	なぜスイスの公用語は4つもあるのか。
言語	日本語と英語とドイツ語の違いを見てみよう。

「なぜ」「どのような」「何」などの疑問詞を使って、自分が最も伝えたいことを疑問形にしてつくった学習

問題になっていることが分かる。

資料15は、学習問題を内容から分析した表である。

【資料15】学習問題における各州の選択数（延べ数）

州名	アジア州	ヨーロッパ州	アフリカ州	北アメリカ州	南アメリカ州	オセアニア州
数	43	68	7	21	10	8

まず、調べた国について世界の6つの州に分けて分類した。アフリカ州やオセアニア州はなじみのある国が少ないため調べた生徒は少なかったが、どの学級にも偏りなく6つの州が網羅されていた。

【資料16】学習問題における選択テーマ（延べ数）

テーマ	気候	宗教	産業	文化	衣	食	住	言語
数	28	13	24	61	24	58	35	8

また、学習問題に出てくるキーワードとして、項目をおよそ8つに分けることができた（資料16）。生徒は、1学期の学習で出てきた特徴ある国のくらしであげたキーワードを基に調べてきたことが分かる。また、これらのキーワードは、学習指導要領に世界の人々の生活について特徴を捉える際の着眼点として記載されている「自然的条件」と「社会的条件」に類型化することができる。結果を見ると、どのキーワードについても偏りなく調べられていることが分かる。

これらのことから、生徒の学習問題が国・地域やキーワードについてのみではなく、全体として様々な国や地域に住む人々のくらしの特徴を捉え、その背景にある自然的条件や社会的条件についても追究したものになったことが見て取れた。

このように、生徒は第2章で学習した内容をふまえて学習問題を設定し、社会科としての内容の伴った追究活動を進めていくことができた。

（ウ）第2の探究場面②—ホ—スターセッションに向けての原稿作成

探究的な学習を進めるにあたっては、「学習問題設定→情報収集・追究→整理・分析・考察→まとめ・表現」のすべてにおいて、生徒個々の発達段階に応じた指導が大切になってくる。生徒の今の段階を見極め、少しがんばればできることを助言していくことを常に心がけた。

まず、1学期から慣れさせている論述の型に合わせて、発表原稿メモを作らせる。できた原稿メモを基にして、ポスターを作成させた。

生徒Aは、資料17のように原稿メモをまとめた。構成メモの様式は、1学期からくり返し行ってきた「はじめ・中・まとめ・終わり」の型に沿った構成となっているため、レポートの内容を生かして順調に書くことができた。資料18は、原稿メモをつくる際の生徒Aとのやりとりである。Aが主張したいと考えていた中国の食品の安全性について助言した。できあがったAの原稿メモの内容は、レポートで詳しくまとめている

中国とロシアの農業と漁業のを中心にして比較し、Aが最も関心をもっている食品の安全性についてまとめていく構成となっている。

多くの生徒が原稿メモを完成させた時点で書き方の例を示した。

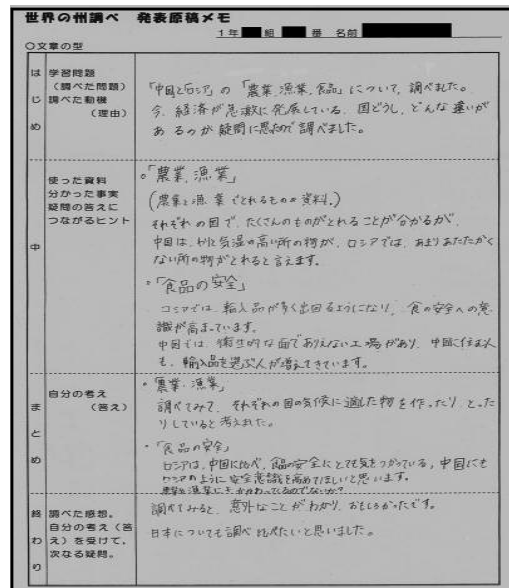
（写真1）

多くの生徒は、1学期に学習した論述の型や図や表にまとめることが定着しており、学習問題について意欲的に追究していくことができた。（写真2-I）

しかし、一部には、

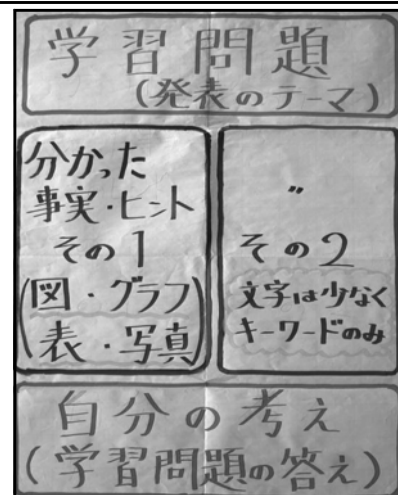
問題設定の段階から差がついてしまう生徒がどの学級にもいた。苦勞している生徒には、支援を手厚く施し、抱えている問題に対して可能な限り助言した。学習問題を作れずにいる生徒には、資料が図書室にある5～6か国の候補から選ばせるようにした。学習問題を文章にまとめ

【資料17】生徒Aの原稿メモ



【資料18】生徒Aとの会話

- T 「農業と漁業のことがよくまとめられているね。両国とも今、経済がすごく発展してきている国なんだけど、何か課題はなかったかな。」
- A 「中国では食品の安全性が、よく問題になっていて…。それも発表したいです。」
- T 「いいね。資料はあった？」「(資料を見て、)なるほど。ロシアと比べて書けそうだね。それでAさんはどう考えたの。」
- A 「日本には、中国から輸入されている物もいっぱいあるので、(使う立場からすると)安全な物を作ってほしいと思います。」
- T 「そうだね。Aさんの立場での思いも加えてね。その考えの根拠になるデータや説明があるといいよ。」
- A 「はい。ありがとうございます。」



【写真1】教師の示したポスターの記載例

られない生徒には、他の生徒の学習問題を例示した。追究資料が集められない生徒には、何を資料として出せばよいか助言した。ポスターがまとめられない生徒には、写真資料を印刷して渡すことでポスターの記述をできるだけ少なくしたり、生徒どうし助言する活動を取り入れたりして(写真2-II), 解決を図らせた。



【写真2】ポスター作成の様子

このように、常に生徒の学習の様子を見取り、できることは何か、今は何に困っているのか、どうすればもう一段高めることができるのかを考え、適宜適切な指導を施すことを意識して行った。

(エ) 第2の探究場面③ーポスターセッション当日

【資料19】ポスターセッションの進め方

ポスターセッションは、資料19のように進めた。ブースを4カ所設置しポスターを掲示する。発表者は、ポスターの内容を2分以内で発表する。ポスターを予め発表の流れに沿って書き、発表者はこれを確認しながら発表する。

- ブースを4カ所設置し、同時に発表を行う。
- 発表者(4人)の動き
発表(2分)→質疑応答(1分)→評価を記入した用紙をもらう(1分)→場所移動、次の準備(1分)
- 聞き手(30人ほど)
 - ・興味ある内容の発表を聞く。
 - ・評価の観点に沿って、評価を用紙に書く。
 - ・書いた用紙は発表者に渡す。
- 発表内容を評価する観点
 - ・発表のテーマが分かりやすいこと。
 - ・資料(事実)が自分の考えの根拠となっていること。
 - ・自分の考えがはっきり書かれていること。
 - ・発表の仕方が分かりやすいこと。

こうすることで、発表者は、原稿ばかり見ることなく、聞き手のことを意識した発表ができるようになった。

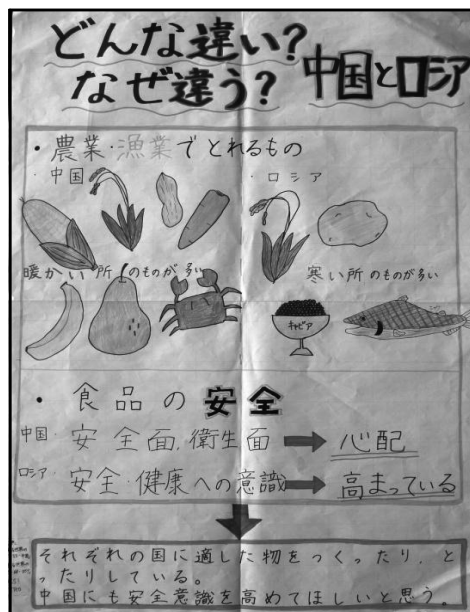
生徒Aは、発表(写真4-II)でポスターを指しながら、聞き手の方を向いて発表することができた。質疑応答(写真4-III)では、「なぜ中国人は、食の安全意識が低いのか」と質問を受けた。「今は経済成長が続いていて、お金をもうけることばかり考えているように思える。もう少し環境に配慮するようになってほしい」と答えていた。

聞き手・質問者は、学習問題の一覧を見て、同時に発表する4人の中から、自分が見に行く発表を決めておく(写真4-I)。発表を聞いた後の質疑応答では質問者となり、発表の内容をさらに深める役割を担う。

生徒Aは、聞き手・質問者として、意欲的に活動し

ていた。聞く時は、相手やポスターを見て真剣に聞いていた。特に、自分が調べた中国、ロシアの発表を聞きに行く様子が見られた。

質疑応答の後には、発表の評価(写真4-IV)を行った。良かった点やアドバイスを書いて発



【写真3】生徒Aのポスター



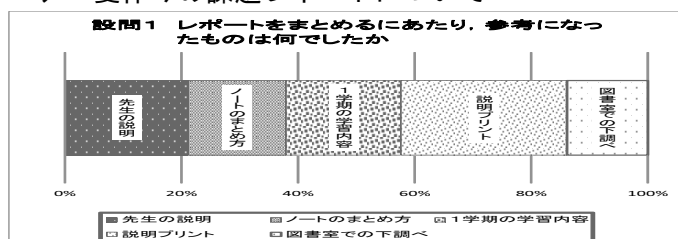
【写真4】ポスターセッションの様子

表者に渡して、次の活動に移った。

発表会当日には、多くの教師が参観しており、生徒には緊張が高まる雰囲気での会であった。そのため、2日間に亘る発表の1日目はなかなか質問が出てこないまま会が進んでいった。

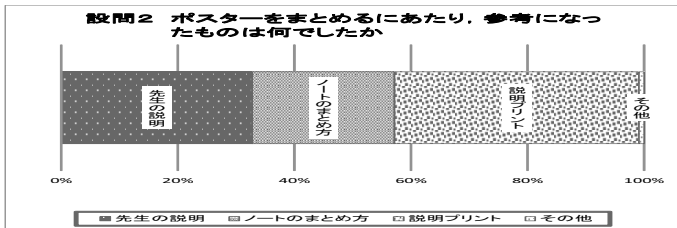
しかし、2日目には、生徒の方から意識して質問をしようという気持ちが強かった。多くの質問が矢継ぎ早にでる様子が各ブースで見られた。当日の生徒の振り返りにも、「昨日よりもたくさん質疑応答することができた」という記述が多くみられた。「自分たちで会を進行できた」という達成感があったようだった。

(4) 考察～実践後のアンケートから～
ア 夏休みの課題レポートについて



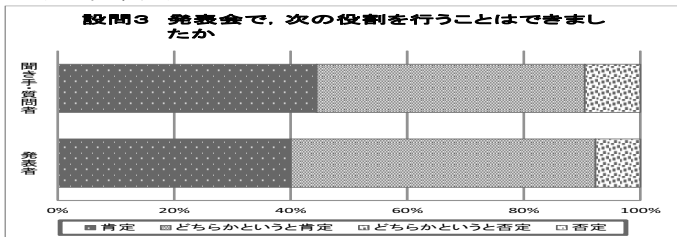
夏休みの課題レポートをまとめる際に、参考にしたものを質問した。授業での説明、ノートまとめ、1学期の学習内容の項目を選んだ割合も同じように高かった。生徒は、レポートの課題が出た時に、その場にあるプリントだけで考えたのではなく、1学期の学習で習得してきた内容を生かしてレポート作成に臨んだ生徒が多かったことが分かる。

イ ポスター資料づくりについて



ポスター作成について参考になったもので多かったのは、説明プリント、授業での先生の説明、ノートのまとめ方の順番となった。生徒からは、説明プリントの中でも特に原稿メモが最も役に立ったという感想が多かった。夏休みの課題レポートを基にして、原稿メモで「発表の設計図」をつくり、そこからポスターを作った流れが効果的であったようである。

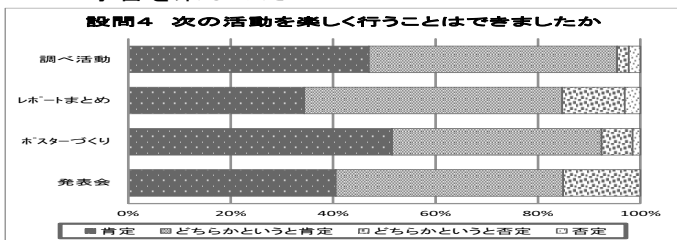
ウ 発表会について



ポスターセッション形式による発表会の中で、発表者、聞き手（質問者）として、役割を担うことができたかを聞いた。どちらの役割も90%以上の生徒が理解でき実践を試みたようだった。

実際の振り返りには、新しく知ったことや勉強になったことを3つ以上列記できる生徒が多く、各学級で3～4名の生徒が書けていない程度であった。大部分の生徒が多く、社会科の学習につながる事象を知り、他の生徒の学びから多くの知識を得て、次の世界の6つの州を学ぶ素地を獲得していったといえる。

エ 学習を楽しめたか



学習全体を見通して、活動を生徒が楽しんで行うことができたかを調査した。どの活動においても、80%以上の生徒が肯定的な回答をした。

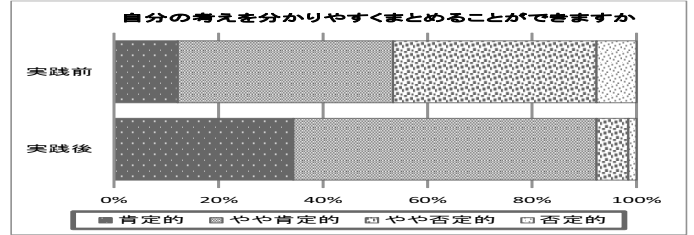
レポートをまとめる活動について、「調べることが好きになった」、「ひとつの国を調べることは、楽し

かった」という記述が見られた。

発表会については、「友達と意見の交流ができた」、「まとめの違いやよいやり方を知れた」、「発表会を自分たちの力でやり切れた」という記述があった。

また、調べ活動から発表までの活動を通して、「自分のペースで進められた（のがよかった）」というものが多くあった。探究型の学習は個人追究の場面が多くある。自分一人でやるということは、自分で責任を取らねばならないことが多く、厳しい部分もある。しかし、できた時には、自分一人でやれたという達成感もある。生徒は苦勞もしたが、自分の手で学習を作り上げた達成感も得たようだった。

オ 調べ方・まとめ方を学ぶことはできたか



実践前、生徒は自分の考えをまとめて伝えることに不安を持つ生徒が多く、約半数が該当していた。しかし本実践終了後の回答を見ると、90%以上の生徒が肯定的な意見となり、大きく改善できたことが分かった。

生徒の記述を見ても、「まとめ方が分かった」、「プリントや説明の通りやっていくとうまくできた」という回答が多くあった。自分の意見をまとめる際には、「設計図をつくる。言葉だけでなく見た目でも分かるようにする。見せるものと説明の流れを揃える」といったやり方を示し、生徒個々の苦手意識を払拭していたことが、改善の一助になったと考える。

カ 教師の評価

項目	学習課題	具体的事実1	具体的事実2	具体的記述	考察	評価	備考
①気候	なぜ、寒い地方に住む人は身長が高いのか。	気温は低い	寒い国は高い	ベルクマンの法則		B	
②宗教	なぜ同じキリスト教なのに、違うところがあるのか。	カトリック	プロテスタント	キリシタン	教派によって生活の違いがある	A	地形や場所によって気候の変動が大きい。
③産業	カナダとロシアの料理はどこからの影響があるのか。	カナダ	ロシア	カナダは移民の国	取れる食材から独自の料理を作り出した。	A	
④文化	「手酌番楽」が進んでいるスウェーデンと日本の違いは何か。	手酌番楽	70歳で踊る	高齢化社会に、面がでいくのでは。	違いがあることがわかった。	B	
⑤衣	寒い気候の中で通す人々の暮らしには、どのような工夫があるか。	防寒	防寒	雪と砂嵐への防備		B	
⑥食	フランスの食生活はどのように変わっているのか。	食生活	食生活			A	
⑦住	デンマーク王国の家の造りはどのように変わっているのか。	デンマーク	デンマーク			A	
⑧言語	なぜスイスの公用語は4つもあるのか。	多言語	多言語			A	
⑨	日本語と英語とドイツ語の違いを見てみよう。	日本語	英語			B	

ポスターセッションのために作成したポスターの記述内容についての評価をまとめた。A評価が35%、B評価が57%、C評価が8%という結果になった。事実を正確に記載することはほとんどの生徒ができていた。その段階を越え、その現象が起きている背景や理由に踏み込んで考えるには、生徒の力量に加え、学習問題の立て方にも相関関係があるように感じる。

生徒は皆、授業で学んだことを生かして、「どのようになっているか」や「なぜ～のようなのか」といった疑問形の学習問題をつくった。「なぜ」「どうして」と理由を問う学習問題をつくった生徒は、自然と現象の背景や理由を問うことになる。その結果、A基準まで達することにもつながった生徒が多くなったのではないかと考える。また、学習問題自体は、「どのようになっているか」といった様子や実態を問う問題を立ててきた生徒であっても、記述の中で現象の背景や理由まで追究して、考察を加えた生徒も多くいた。いずれにせよ、学習問題を疑問形で立てさせ、生徒に追究する内容を明確にもたせて活動に臨んだことが奏功したといえる。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

○「習得・活用・探究」の流れを意識し、世界地理学習全体を見通した学習をつくることができた。

この視点から、第3章と第4章の単元配列を入れ替えた実践を計画することができた。結果、夏休みを利用してのレポート作成と2学期のポスターセッションという2度の探究型の学習と、そこで学んだことを生かしてさらに詳しく世界の6州を習得・活用する学習の流れを構築することができた。

○習得・活用場面で、探究場面につながる調べ方・まとめ方を学ばせることができた。

予習・授業・復習での調べ方、論述のしかたやレポートのまとめ方を教えたことで、生徒は学び方を学び、学んだことを生かして、探究場面で自ら追究することができた。

○探究場面で、個の学びを保障することができた。

探究場面での学習問題は、生徒が既習事項を生かして設定することができた。習得・活用場面でやり方を学ばせ、追究時間を可能な限り確保して自己追究させた。生徒がまとめあげた内容は、その後の地理学習の習得・活用につながるものが多くあった。

上記3点のことから、学んだことを生かして、可能な限り生徒が自分一人で追究する、探究型の学習を展開することができた。生徒は、学び方の方法面と社会科学習の内容面の両方を学ぶことができた。

(2) 課題

○大項目を見通した習得・活用・探究の流れを、3年間で繰り返し行うカリキュラムの開発

歴史的な分野、公民的分野でも探究型の学習に足り

る問題は当然存在するはずである。生徒が個人追究する場面を設定して、成長につなげたい。

○調査活動から発表への流れを他教科・領域に転用

今回のポスターセッション方式の発表は、他教科・領域でも言語活動の手段として、転用可能なものとする。本校全体に広め、生徒が学んだ手法を他の活動に生かしていけるようつなげていきたい。

これらのことを行いながら、私自身も生徒の活動を見取る目を養い続けたい。そして今後も、授業づくりの活動の中で、目の前の生徒にとってよりよい実践は何かを考え、形にできるようにしていきたい。

註

- (1) 『中学校学習指導要領総則』(文部科学省 2008年) 14ページ
- (2) 原田智仁『児童・生徒の習得・活用型学力を育成する社会科学習指導方法と評価に関する研究』(日本教材文化研究財団HP 2010年) 7ページ
- (3) 『中学校学習指導要領解説 社会編』(文部科学省 2008年) 27ページ
- (4) 佐藤洋一・萩原孝『実践的授業研究Ⅰ』2013 愛知教育大学講義より

参考文献

1 文部科学省関係資料

- 『中学校学習指導要領総則』(文部科学省 2008年)
- 『中学校学習指導要領解説 社会編』(文部科学省 2008年)
- 『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』(文部科学省 2008年)

2 中学校教育・社会科教育に関する文献・資料等

- 原田智仁『児童・生徒の習得・活用型学力を育成する社会科学習指導方法と評価に関する研究』(2010年)
- 岩田一彦・米田豊『「言語力」をつける社会科授業モデル』(明治図書, 2009年)
- 小原友行『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン』(明治図書, 2009年)
- 北俊夫『なぜ子どもに社会科を学ばせるのか』(文芸堂, 2012年)
- 北俊夫『あなたの社会科授業は基礎・基本を育てているか』(明治図書, 2005年)
- 横浜市教育委員会『言語活動サポートブック くりかえし指導したい44の言語活動』(時事通信社, 2012年)
- 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校
- 『各教科等における「言語活動の充実」とは何か 効果的・実践的に位置付けた学びの育成』(三省堂, 2009年)
- 高木展郎『各教科等における「言語活動の充実」その方策と実践事例』(教育開発研究所, 2008年)
- 松野孝雄『論理的な記述力を伸ばす授業づくり -言語活動のための授業メニュー15-』(明治図書, 2010年)

3 習得・活用・探究に関する文献・資料等

- 佐藤洋一『国語科「習得・活用型学力」の開発と授業モデル4』(明治図書, 2011年)
- 西岡加名恵・田中耕治『「活用する力」を育てる授業と評価 パフォーマンス課題とレポートの提案』(学事出版, 2009年)
- 佐藤真『各教科等での「見直し・振り返り」学習活動の充実』(教育開発研究所, 2009年)
- 市川伸一『「教えて考えさせる授業」を創る』(図書文化, 2008年)

付記

愛知教育大学教職大学院において、このような研修の機会を与えてくださった愛知県教育委員会、知多教育事務所、知多市教育委員会にお礼を申し上げますとともに、知多市立中部中学校校長先生をはじめとする教職員の皆様には、研修にご理解、ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。この教職大学院で学び得たことを、少しでも現場の先生方や生徒に還元できるように努めていきたいと思っております。

また、課題実践研究の計画を進めるにあたり、親身になってご指導いただいた、愛知教育大学教職大学院の萩原孝先生、中妻雅彦先生をはじめ、諸先生方に厚くお礼申し上げます。